

モーセの意図の探求  
——アウグスチヌス『告白』Ⅻ巻——

柴田 美々子

アウグスチヌスの『告白』Ⅻ巻は、創世記冒頭の解釈にあてられる。そこでは創造という事柄自体に関する議論とともに、創世記の‘著者’モーセの意図をめぐる解学的議論が展開される。モーセの意図 (voluntas)<sup>1)</sup>——創世記の個々の語句を記した際、彼はその語句によって何を意味しようと思っていたのか——を探ることは、アウグスチヌスの聖書解釈においていかなる意義をもつのであろうか。

一般にテキスト解釈において著者の意図に対してとられる立場は、次の二つであろう。一つは、歴史的著者の意図の解明を最重要の課題とする所謂歴史主義的な解釈の立場である。これに対し第二は、構造主義をはじめとする現代のテキスト理論の立場であって、テキストを著者から独立の存在とみなし、著者の意図した意味ではなくテキスト自体に内在する意味を、或はテキストの構造を探ろうとする。

研究者達はしばしばアウグスチヌスの立場を、後者に似て著者の意図に重きを置かぬものとみなしている<sup>2)</sup>。ただしアウグスチヌスにおいては、テキストの内部に向う探求が問題なのではなく、むしろテキストを離れて自己の内面に向い、そこで真理の教えに耳を傾けることが重要なのだ、という<sup>3)</sup>。いずれにせよ著者の役割は重要性を失い、その意図の探求は問題とされないことになるのである。

だが、『告白』Ⅻ巻の議論は、本当にモーセの意図を軽視するものなのであろうか<sup>4)</sup>。むしろそれはモーセの意図の探求に大きな意義を、ただし歴史主義的解釈の場合とは別の意味で、認めているのではないだろうか。

## I

『告白』Ⅻ巻には、創世記の著者モーセの意図に関し自説を主張して争う「反対者ら (contradictores)」が登場する。彼らは、問題の事柄に関して何が真実かという点ではアウグスチヌスと一致しながらも、「モーセが考えていたのは君の言うことではなく、自分の言うことの方なのだ」(34節)と反対して譲らない。この「反対者ら」を前にして、アウグスチヌスは神に向い次のように語る<sup>5)</sup>。

「真実を告げる全ての精神を照らす光よ、あなたが真実だと示される事柄を考えたのであれば、たとえ読んでいるテキストの著者はその事柄を考えなかったのだとしても、何の悪いことはありません。」(27節)

読者がそこで真実を読み取るならば、それが著者の考えとは異なっていたとしても、何も不都合はない<sup>6)</sup>。モーセが創世記のその箇所を何を読者に理解させようと考えていたか、「語り手本人の意図」(32節)は知ることができないのに対し、創造という事柄について何が真実であるか、「事柄の真実」(同)の方は、モーセを教えた真理自身から教えられ得るのである。

ここから、〈アウグスチヌスにとって問題なのは、事柄の真実を真理に直接尋ね求めることであって、語り手の意図の探求ではない〉とする解釈も生じる。だが、アウグスチヌスは著者の意図の探求を放棄しているわけではない。その探求の努力の必要性は、Ⅻ巻末の結論部でも次のように明言されている。

「私の語ったことが、あなたの奉仕者(モーセ)が考えたことであつたなら、正しく一番良い解釈です。実際、そうするように私は努めなければなりません」(43節)<sup>7)</sup>。

実際、著者とは別の真実を考えても「何の悪いことはありません」と言う時、アウグスチヌスはそこに、「各人が聖書の中で、聖書を記した人間がそこで考えたことを考えようと努めている限り」(27節)という限定を付しているのである<sup>8)</sup>。だが何故、著者の考えを見出そうと努力しているのであれば、著者の考えたのとは異なる真実を考えても構わないということになるのであろう。

そもそも、知ることでできない著者の意図を、我々はどうのように探求するのか。実際、我々が著者の考えを知り得ないのは、著者が故人であつて、もはや直接その考えを説明しては貰えぬから、というだけではない。

「モーセ自身が私達の前に現われて、“自分はこういうことを考えたのだ”と語ってくれたとしても、私達はモーセの考えを(精神を照らす真理の光を見るように)見る

わけではなく、信じるのです」(35節)。

ある考えが真実か否かは、精神を照らす真理の光の内に確実に見てとれる。これに対し他人の心中は、我々の身体の眼によっては勿論、精神の眼によっても「見る」即ち「知る」ことはできない。アウグスチヌスが、モーセの意図に関して争う「反対者ら」に対し強調するのもこの点である。

しかしながら、ここで彼は、他者の考えは知り得ないのだから探求を断念すべきだ、と言っているわけではない。「私達はそれを見ない (nec...eam videremus)」に続けて、「しかし私達は信じるでしょう (sed crederemus)」と言われることに注目すべきである。「知 (videre)」の対象とはなり得ぬモーセの考えに我々が関わっていく仕方、は、「信 (credere)」とされるのである<sup>9)</sup>。

アウグスチヌスはこの「信」の地平で、相異なる二種類の推測をモーセの意図に関して行う。即ち一方では、モーセは創世記を記した時、後世の読者がそこに読み取るであろう“あらゆる真実”を予め意図していた、とする (36;42節)<sup>10)</sup>。が、他方では、真実な説が様々ある中で“ひときわすぐれた一つの説”だけをモーセは念頭に置いていた、とする (41;43節)。この一見相矛盾する二つの言表には、しかし共通する点がある。どちらの場合においてもアウグスチヌスは、モーセがそのように語り得たのは“神の賜物”や“啓示”によると「信じる」のである。

「信」の地平で探求されるモーセの意図とは、単なる人間モーセの私的な意図なのではない。すぐれた神の僕モーセが神の霊に満たされて抱いた意図である。実際、「神の僕モーセが真理の霊に満たされて語ったのだ、と固く信じる」(29節)<sup>11)</sup>ことは、「モーセの意図を通して神の意図を尋ねる」(32節)探求の出発点であり、その信をもたぬ者は、聖書の「敵」として退けられるのである (17節, 23節)。

だがここで、次のような問が当然生じてこよう。即ち、もしモーセの意図がモーセ自身の私的な意図ではなく、神的な靈感によるものであるなら、「モーセの意図」というものは結局「神の意図」の内に吸収され、解消してしまうのではないか。読者はもはやモーセの意図の探求という「迂路」をとる必要はなく、むしろ神自身に直接問い求めるべきではないのか<sup>12)</sup>。

これに対するアウグスチヌスの答えを探るに先立ち、我々は先ず、「反対者ら」がモーセの意図に対してとる態度を検討することにした。アウグスチヌスの解釈のあり方は、「反対者ら」のそれとの対比において示されているからである。

## II

「反対者ら」は聖書の「敵」とは異なり、事柄の真実を真実と認める点で、またモーセを従うべき権威と認める点で<sup>13)</sup>、アウグスチヌスと一致する(23節)。彼らもまた、「モーセを神の敬虔な僕と、そしてその書物を聖霊の託宣と信じている」(22節)<sup>14)</sup>と言われる。

だが、創世記の個々の語句を実際に解釈する際に彼らが為しているのは、自説こそがモーセの説だとする「性急な断定 (*temere affirmare*)」(35節)に他ならない。「知識があるわけではない、単にむこうみずながむしゃらさ (*temeritas*)」(34節)と性格づけられる彼らの態度は、無知の自覚を伴った「信」からは程遠い<sup>15)</sup>。それはむしろ「勝手な思いなし (*opinari*)」の態度であるといえよう<sup>16)</sup>。

事柄の真実性に関する意見の一致だけでは満足せず、著者の意図に関して自説を主張する「反対者ら」は、一見モーセの意図に極めて大きな関心を抱いているかのように見える。しかし、彼らはモーセの意図の不可知性という現実に関心を閉ざしている。彼らが問題としているのは、モーセの意図自体ではなく、モーセの意図に関する彼ら自身の思いなしなのである<sup>17)</sup>。

さて、このような、「反対者ら」は、どのような言語観を抱いているのであろう。彼らは、自分が「モーセの考え」と呼ぶものに非常にこだわり、自分の言うその一つの事柄だけをモーセは意図したのだと主張する。彼らはモーセの言葉に一義的な指示の機能しか認めない。それも二重の意味において。第一に彼らは、モーセの言葉が多義的に語られている可能性を認めようとしない<sup>18)</sup>。第二に彼らは、モーセはその言葉によって何を指示しようとしたかのみを問題とし、そもそもそのように言葉が発せられることで究極的に何が目指されているかは問わない。言葉の指示機能のみを問題とするこの言語観は、次のように言い表すことができよう。

〈言葉とは、発話者が他者に伝達しようとする意図する考えをそれによって指し示す記号である。話す或は書くとは、言葉という記号の発信行為でありそれ以上のものではなく、また読む或は聞くとは、その記号の受信と解説に他ならない。〉

この言語モデルにおいて言葉が言葉としての機能を果たすのは、発信者が意図した意味と受信者が理解した意味が一致する場合である。ところがこれは、語り手の立場からすれば、自分の考えが言葉を介して聞き手の考えとなる場合であるが<sup>19)</sup>、逆に聞き手の側からすれば、丁度「反対者ら」にはそう思われるように、自分の考える意味こそが語り手の考えた意味だということになる場合なのである。言語記号によるこの

伝達モデルは、一見純粋に客観的なメカニズムのようであるが、実は各人の自己中心的なパースペクティブの内に成立している。

『告白』Ⅰ巻、赤児が初めて意図的にしるしを用いる場面の記述を参照しよう。赤児が記号による伝達を試みるのも、自らの欲望の充足のために他ならない。

「私は、自分が欲求する事柄を人々に示したいと思っていました。その人達によってかなえてもらうためです。……そこで、手足をばたつかせたり、声をあげたりしました。それは、自分の欲求する事柄に類似のしるしでした」(Ⅰ巻8節)。

ここで赤児の「私」は、自分の意図する通り、欲求する通りに相手を動かすために、しるしを用いて他人に働きかける。同様に「反対者ら」も、「君の説ではなく自分の説こそが、モーセの説なのだ」と語る時、ただ単に自分の考えを言葉によって外に表示しているだけではない。そう主張することによって、自分の考えを相手の中に無理にでも押し込もうとしている。一見客観的な情報伝達のメカニズムの中での単なる指示の媒体の如くみなされた言葉は、実際には、自分の意図を力づくで相手に押しつける手段として働く。

アウグスチヌスは、「反対者ら」の言葉を、自らのそれとは区別して、「争い (contendere)」の言葉と性格づける (27;34;35節)。そこには、テキストを共に読む仲間の人間達に対する配慮が欠けている<sup>20)</sup>。隣人に対する「愛 (caritas)」が欠けているのである。ところが、アウグスチヌスの信じるところによれば、モーセの言葉は、単に或る事柄に関する真実を伝えるためだけでなく、他ならぬ二つの「愛」の掟のために語られている。アウグスチヌスの「反対者ら」に対する根本的な批判は、モーセの言葉が様々な真実の内のどれを指示しているかをめぐる「争い」によって、モーセの言葉が究極的に目指している「愛」自体を損うことの愚かさ (35節) に向けられている。

「反対者ら」は、隣人愛ばかりでなく真理への愛も欠いている。彼らは、「自分の考えを、それが真実であるからではなく、それが自分の考えであるが故に愛している」(34節) のである。

彼らはまた、語り手モーセに対する真の関心も欠いている。彼らにとってモーセは、自分が勝手に解釈することになる記号の、単なる発信者にすぎないのである。

### Ⅲ

これに対しアウグスチヌスは、隣人愛を重んじ「争い」を退ける<sup>21)</sup>一方、真理にも、

そしてモーセにも、真剣な愛と関心を寄せる。『告白』ⅩⅤ巻5節のテキストを検討することにしたい。これは、先に引いた「モーセが現われてその考えを説明してくれたとしたら、我々はそれを……見るわけではないが信じるであろう」という「信」の場面（ⅩⅤ巻35節）に平行する箇所である。

「……モーセがラテン語で語るなら、私は彼が何を言っているか、分るでしょう」。

モーセが、アウグスチヌスにとり既知の言語であるラテン語で語ってくれたとする。アウグスチヌスはその言葉の音の響きを耳で聞いて、それが何を指示するかを理解する<sup>22)</sup>。しかし、モーセが語るのを聞くとは、単に言語記号の解説におわるものではない。

「私の内部で、内なる思いの住処で、真理が、……音節的な響きなしに語るでしょう。“そのひと（モーセ）は真実を語っている”と」。

モーセの言葉に耳を傾けたアウグスチヌスは、今度は自らの内部で、“彼は本当のことを言っている”と真理が語るのを聞く。が、それだけではない。

「すると私は、ただちに、確信に満ちて、あなたのそのひと（モーセ）に言うでしょう。“あなたは本当のことを言っている”と」。

ここでまず注目すべきは、アウグスチヌスのモーセへの関心は、モーセの言葉を受け取り解説した後においてもなお存続しているという点である。モーセは、記号の受信が済めば無用となる単なる記号発信者とはみなされていない。ここで問題とされているのは、幾世紀も前に創世記を著した歴史的著者としてのモーセであれ、つい先程アウグスチヌスの前に現れてその考えを説明してくれたモーセであれ、言語記号の発信者として過去にその機能を果たしてしまったモーセなのではない。正に今、アウグスチヌスの前に現前し、アウグスチヌスが語りかけることができる、今ここにいるモーセが問題なのである。

アウグスチヌスは、モーセの言葉が彼方に指示する対象だけでなく、眼の前に現前するモーセ自身に注意を向けている。モーセはアウグスチヌスに語りかけ、アウグスチヌスはモーセに語り返す。ここで言葉は、単なる指示の媒体ではない。実際モーセは、単に創造に関するあれこれの真実を伝達するためだけに語ったのではなく、「全てを愛（caritas）のために語った」（35節）、「愛の二つの掟のために、何であれその書物の中で考えたことを考えた」（同）とアウグスチヌスは「信じる」のである。

ここで我々は、〈何故、‘モーセの意図の探求に努める限り’という条件の下で、モー

セの考えたのとは別の真実を考えることも是認されるのか?> という先の間に対して、次のように答えることができよう。

本当にモーセの意図を知ろうと努めているならば、たとえそれを言い当てることができなくとも、読者は何事かを為し遂げている。即ち、「反対者ら」のように、歴史的著者モーセが過去に抱いた意図を、一義的指示のメカニズムの中で捉え得るものと思ひなし、結局それを読者自身の私的な意図ですりかえる、というのではなく、今その言葉によって自分に語りかけてくる語り手モーセの内に、神的なすぐれた意図が現前することを信じ、それを探求するのであれば、読者は、自己中心的なパースペクティブへの執着を脱して、愛の地平へと入っていく。この「愛の広がり」(Ⅻ巻32節)にあってはじめて、ひとは真理に関わり得る。というも、私的な欲望の地平にとどまる者は、「万人のものである」真理を私物化しようとして、「公共的な真理の場から追われる」(34節)のである<sup>23)</sup>。

さて、Ⅻ巻5節で次に注目すべきは、自己の内で真理の声を聞くことで外なるモーセは消え、以後は真理との内なる対話が展開していく、ということにはならず<sup>24)</sup>、真理の声の聴取は「直ちに (statim)」モーセへの応答となっていくという点である。しかも、そこで真理は「シラブルの分節的な響きなしに」語る。時間の流れに沿って語りはしない。とすると、この場面で時間と共に生起していく出来事は何かといえば、それは先ずモーセが語り、そしてアウグスチヌスが語り返す、この二人の人間の間での対話である。

真理との対話、モーセとの対話は、殆ど同時に、しかしそれぞれ独自のあり方で行われる。モーセの意図の探求は、モーセが真理の霊に満たされていると信じているところから始まるのであり、確かに真理の探求と切り離すことはできない。とはいえそれは、真理の探求の内に解消されてしまうことにはならないのである。

ところで、Ⅻ巻5節では、モーセとの場面の前後で次のように述べられる。

「モーセはその言葉を記して去り、あなたによって此世からあなたのもとへと移りました。そして今は私の前にいません。もしいたら、彼に尋ねるのですが……」「モーセに尋ねることはできないのですから、真理よ、我が神よ、お願いです。……あなたが御自分の僕（モーセ）にそれらのことを語らしめたのですから、私にもそれを理解させて下さい。」

モーセは今や故人であり、詳しい説明を彼に求めることはもはやできない。とする

と結局、モーセという回り路によらず、直接真理に尋ねる他ない、ということになるのだろうか。

しかしながら、モーセは死んで無に帰したわけではない。目に見える此の世界を去って「あなたのもとへ」移ったのである。モーセは今や真理のもとにいる。実際、「もしモーセが眼の前に現われたなら……」というのには確かに非現実の仮定であるが、しかしアウグスチヌスは、その仮想の場面においても、そのひとの言葉は真実を告げると自ら信じる、その人物に向って語りかけているのであり、単にその身体が眼に見え、その音声が耳に聞こえるというだけのモーセを問題としているわけではない。創世記を記した歴史的著者モーセは、確かに身体的には死んでおり、その意味では「我々の前にいない」。しかし、そのモーセは、彼を信じ真理を求める読者には、その信の地平の内に真実を告げる語り手として現前するのではないだろうか。

#### 註

- 1) 著者の意図としては他に、発話の動機 (causa) としての、例えば読者を欺く意図 (『嘘言論』3,3以下参照) なども考えられるが、Ⅻ巻で問題とされるのは専ら *significare* に関わる意図である。
- 2) Wieland, W., *Offenbarung bei Augustinus*, Mainz, 1978 は、アウグスチヌスの解釈論を構造主義的な「テキスト世界」の理論に関係づける。
- 3) O'Connell, R.J., *Art and the Christian Intelligence in St. Augustine*, Oxford, 1978, p. 104 および Pépin, J., "Le livre XII des Confessions ou exégèse et confession" *Le Confessioni di Agostino d'Ipbona—Libri X-XIII*, Palermo, 1987 特に p. 85 以下参照。
- 4) 『告白』と同時期の執筆と推定される『キリスト教の教え』序章は、人間の聖書記者の役割を極めて高く評価している。加藤武『アウグスティヌスの言語論』創文社, 1991, 292頁参照。
- 5) 松崎一平「アウグスティヌスと創世紀——『告白』巻12に見る彼の創世記把握——」『西洋哲学史研究』京都西洋哲学史研究会 1983 所収は、Ⅻ巻の論述が神を判者とする法廷討論の形式をとることを指摘する。
- 6) 既に『信の効用』(391年) 10節は、この種の誤解の有益性を極めて高く評価している。
- 7) Wieland (139頁) と Pépin (83頁) は、43節を引用する際、この一文を省略している!
- 8) 『キリスト教の教え』III, 27, 38参照。



- 9) 『見えざるものへの信 (*De fide rerum quae non videntur*)』2節, 3節 (この書物は偽書とされたこともあるが、アウグスチヌスが『告白』Ⅻ巻とほぼ同時期に執筆したものと推測されている。) 及び『信の効用』11節参照.
- 10) Margerie, B. de, *Introduction à l'histoire de l'exégèse III. saint Augustin*, Paris, 1982, chap. II は、アウグスチヌスがそこで自らをモーセの立場に置いて考えている点に注目し、アウグスチヌスにとりモーセの意図がもつ重要性を強調する。また Pontet, M., *L'exégèse de s. Augustin prédicateur*, Paris, 1945, pp.145-146 は、聖書の言葉の多義性に、靈感による詩的言語との類比を見る。
- 11) 同様に、「彼は真実を語ると信じる」(27節)、創世記を「あなた(真理)の書物」として「信じる」(10節)。
- 12) Pépin, p. 82 参照。これに対し「迂路」の重要性に関しては、加藤武「伝達の回路」(前掲書288—294頁)、また「解釈の迂路」(同230—250頁)参照。
- 13) モーセの権威を認めていなかったならば、創世記の内に真実を、モーセの考えとして読み取ることにはなかつたであろう。『信の効用』13節参照。
- 14) ここでの「信」は「思いなし」をも含む広義の「信」(『信の効用』25節及びその B. A. 版補註13参照)にあたろう。
- 15) これに対し、それぞれ解釈を異にするが、「反対者」ではない人々に関しては、具体的な語句解釈の場面でも *credere* という語が用いられている (39節)。
- 16) *credere* と *opinari* の相異については、『嘘言論』3節及び『信の効用』25節参照。
- 17) 『創世記逐語解』I, 18, 37参照。
- 18) 或る言葉が場面により転義的に用いられること、その意味での言葉の多義性は彼らも否定しないが、モーセが執筆時に考えていたのはその内の一つの意味に限られるとするのである。
- 19) 『キリスト教の教え』II, 2, 3参照。
- 20) 人間の共同体 (*societas humana*) への配慮に関しては、『信の効用』24節及び Lütcke, K.-H., *Auctoritas bei Augustin*, Stuttgart, 1968, S. 100 参照。
- 21) 「反対者」に対しても (27;34;35節)、聖書の「敵」に対しても (23節) 争いを拒否し、誤った解釈を行う「未熟な者ら」に対しても寛容に臨もうとする (36節)。「平和」の重要性に関しては、『洗礼論』II, 5, 6参照。
- 22) 勿論、モーセの意図した意味を理解するとは限らない。
- 23) Lütcke, S. 68 によれば、アウグスチヌスが求めるのは、単に個人の理性に基づくだけの「私的真理」ではなく、人間の共同体を規定する権威をもつ「公共の真理」である。
- 24) この点、「敵」を相手にする場合 (Ⅻ巻23節) と異なる。